

キョウカンカク
美しき夜に

天祢涼

RYO AMANE

DAKINIGHT

講談社
文庫

著者 | 天祢 涼 1978年生まれ。『キョウカンカク』（講談社ノベルス・後『キョウカンカク 美しき夜に』と改題。講談社文庫）で第43回メフィスト賞を受賞し、2010年2月にデビュー。

著書に『闇ツキチルドレン』『空想探偵と密室メイカー』『セシューズ・ハイ 議員探偵・漆原翔太郎』（講談社）、『葬式組曲』（原書房）がある。また『綾辻行人殺人事件 主たちの館』（講談社ノベルス）にノベライズ・小説「綾辻行人殺人事件 主たちの館」が収録されている。

『葬式組曲』は第13回本格ミステリ大賞の候補作、同書収録の「父の葬式」は第66回日本推理作家協会賞短編部門の候補作となった。

キョウカンカク ^{うつく}美しき夜に ^{よる}

^{あまね} ^{りょう}
天祢 涼

© Ryo Amane 2013



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2013年7月12日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——株式会社精興社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277517-5

目次

序章

7

第一章 探偵

12

第二章 助手

63

第三章 容疑者

116

第四章 監視者

170

第五章 彷徨者

242

第六章 フレーム

310

終章

374

解説 小森健太郎

396



講談社文庫

常州大学図書館

牛車藏 申カ書 美瑛 夜に

天祢 涼

講談社

目次

序章

7

第一章 探偵

12

第二章 助手

63

第三章 容疑者

116

第四章 監視者

170

第五章 彷徨者

242

第六章 フレーム

310

終章

374

解説 小森健太郎

396

キヨウカンカク

美しき夜に

「そうだ。それに僕は、共感覚について少々知っている。共感覚の人は感覚がからみあっている」と私は説明をはじめた。「音に色を感じたり、音に触覚を感じたりする。君の場合は、どうやら味に形を感じるらしいね」

「ああ、安心したよ」とマイケルが口をはさんだ。「つまり正常なんだね？」

「正常というのは、非常に相対的な言葉だからね。珍しいケースだとだけ言っておこう。変わっているが、全然ないというわけじゃない」

——リチャード・E・シトローウィツク

『共感覚者の驚くべき日常 形を味わう人、色を聴く人』より

序章

二〇※※年十二月十九日。

音宮美夜がX県星守市に滞在して、およそ二週間。豪勢なホテル暮らしにも飽きたので昨夜のうちに離れるつもりでいたが、急な依頼による予定変更には慣れている。

十二階から見下ろす星守湾は壮観だった。絵の具を流し込んだように真つ青な海は、陽光を浴びて煌めいている。市がここ十年来進めてきた公害対策の成果だ。一方で、整地された沿岸にはこのホテルをはじめ、星守マリンタワーやショッピングモールなどが建てられており、行政の方針がエコ一辺倒でないことが見て取れる。

開発された沿岸部を眺めていると、往き交う人々が、自然と視界に入ってきた。

会話をしようとして、携帯電話のディスプレイを眺めているようと、イヤホンで耳を塞いでいようと、他人にぶつかることなく、目的地に向かっていく人々。

器用なものだ、と半ば感心した後、視線を市街地へと移す。南部は住宅が整然と建ち並び、田舎の地方都市から脱却しようとする勢いと賑わいとが感じられる。対して

市の北部は、廃工場が取り残され……。

「ま、そんなわけで音宮サンには、フレイムの件をお願いしたいわけですよ」

「景色を眺めて雰囲気に浸ってたのに、ぶち壊し」

振り返らずに云い捨てる美夜の背後で、矢萩^{やはぎ}が声を潜めて笑う。

一週間ぶりに聞く矢萩の笑い声は、やはり不快だった。

「音宮サン、海はお嫌いでしょう。というより、あの色が」

「矢萩サンの部下は？ 頼りになんないの？」

無視して話を進める。

「頼りにはなりますよ。ただフレイムに関しては、音宮サンにお任せした方がよさそうだと判断しましてね。適任ですよ。音宮サンの能力をもつてすれば、決着もあつという間でしょう」

「含みのある云い方、やめてくれる？」

「含みのない云い方、ご希望ですか？」

美夜は首を横に振った。矢萩がどんな云い方をしようと、自分のなすべきことは決まっている。ほかに選択肢がないこともわかつている。

「フレイムって、例のサイコキラーだよね？」

「そうです。被害者を殺害した後でわざわざ遺体を燃やすことから、マスコミが炎

『炎』^{フレイム}

「『炎』と呼び始めました。なんとも悪趣味なセンスですよ。ちなみに遺体をどこで焼いているのかは不明。焼き具合は、ステーキにたとえるならミディアムとウエルダンの中間くらい。それなりの火力で焼いてはいるが炭化するほどではない、といった具合です」

「その立場でステーキにたとえる矢萩サンだって、充分悪趣味だと思うけど」

「そんな髪の色をしている人に、趣味について批評されるいわれはありません」

「一仕事終えたばかりで、この数日はニュースを全然チェックしてないの。詳細を教えて」

再び無視して話を促す。

「わかりました。最初の被害者である女性が発見されたのは、約一カ月半前の十一月二日。身許は不明。市内にある老人ホーム『喜樹園』^{きじゆえん}の屋外に設置された業務用生ごみ処理機に突っ込まれているのを、出勤してきたソーシャルワーカーが発見。生ごみにまみれた遺体は焼かれていたが、司法解剖の結果、絞殺と判明。年齢は四十から六十歳前後。栄養状態がよくなかったことから、ホームレスの可能性あり。集団に属さず単独行動していた場合、身許の特定はかなり困難。現在、行方不明者のリストを洗っています、時間がかかっています。」

その約三週間後、十一月二十二日に発見された二人目の被害者も、外表^{がいひよう}の主だった

特徴は一人目とほぼ同じ。女性で、現在に至るまで身許は不明。こちらは、市内にある酒造メーカー『清川酒造』^{きよかわしゅぞう}の蔵に捨てられていました。より正確に云えば、蔵にあった使用中の酒樽に入れられていたそうです。やはり遺体は焼かれていました。

いずれの事件も、殺害場所、焼却場所ともに特定できていません。我らがフレイム殿は、なんだってこんな手の込んだ殺人をするのか」

「フレイム本人に聞いてみればわかるでしょ。まあ、そういうことをする理由——動機に、解決の手がかりがあるかもしれないけど。とにかく、ホームレスの女性を狙った連続殺人の線で調べればいいわけだ」

「正直、僕もそう思っていました。でも、やはり予断は禁物ですね」

「回りくどい云い方しないでよ」

振り返り、矢萩を睨む。

「そういう云い方ばかりしてると、仕事、断るよ」

「これは失礼」

軽く頭を下げる矢萩。

——断るつもりなんて微塵^{みじん}もないくせに。

そんな声が聞こえてきそうな下げ方だった。

「で？　なにが予断だったの？」

「十二月十四日早朝、第三の遺体が発見されました。住宅街にある星守市七号公園ななごうこうえんに、無造作に遺棄されていたとのこと。殺害されたのは十三日深夜。絞殺された上で、やはり遺体は燃やされていました。女性なのは共通していますが、先の二人と違って、今回は鹵型で身許があつまり特定できました」

一カ月半で犠牲者が三人か。なるほど。

矢萩が自分に依頼してきた理由が、わかった気がした。

「被害者は天弥花恋あまやかれん、十六歳。市内の県立星守高校に通っている——いや、通っていた少女です」

第一章 探偵

1

十二月二十日。

天弥山紫郎は星守マリインタワーの展望室で、一人、窓外に顔を向けていた。

昨日までの晴天が嘘のような、鉛色の空と海。それらは網膜に映ってこそいるものの、現実の風景であるという認識を持てない。

花恋は、ここからこうして、景色を眺めるのが好きだった。瞬きすら惜しむように、両の瞳を見開いて。

この星守マリインタワーは、近場にショッピングモールができるまで、毎日閑古鳥が鳴いていた。人が少ない上に、入場料も安い。そのためここは、自分達兄妹の格好の遊び場となった。一時期は、毎日のように来ていたものだ。

さすがに思春期を迎えてからは一緒に来ることも減ったが、この場所には、花恋との思い出がつまっている。

忌引きで学校を休んでいる今日も、自然と足が向いてしまった。

ショッピングモールができてから、平日も休日もなく賑わっている星守マリントワ―。それが今日はどこか閑散としているのは、フレイムのせいに違いない。

「被害者は二人ともホームレスらしいから、自分達には関係ない」。花恋が被害者となるまでは、大多数の市民がそう思っていたことだろう。自分だってそうだ。被害者を気の毒には思ったが、市内で起こっている事件でも、テレビの向こう側のフィクションのようにしか感じていなかった。

しかし花恋の死は、フレイム事件の様相を一変させた。誰もが被害者となりうる可能性が突きつけられたのだ。同時に、「女子高生が焼かれた」という事実はセンセーショナルに扱われ、世間の耳目を一層集めることとなった。

花恋の遺体発見から二日後。天弥家を取り囲むマスコミを見て、聞き込みにきた刑事は眉をひそめた。

「マスコミは、ご遺族の直接のコメントがほしいのでしょう。しかし、彼らとて鬼ではない。話ができる状態にないことを知れば、おとなしく引き下がるはずです。記者会見で、上の者にそのように云わせましょうか？」

小太りで、有能そうに見えない人ではあつたが、そう云つてくれたのはありがたかつた。

確かに母——姫子ひめこの憔悴は、尋常ではなかつた。山紫郎と会話することすら覚束おぼつかないのだ。小太り刑事の言葉に甘えようかとも思つた。

しかし「僕がマスコミと話をします」と申し出た。ここで拒否しては、一部のマスコミがパラッチと化し、執拗まことにつき纏つてくるかもしれない。そんなことになつたら母は壊れてしまう。彼らのガス抜きのためにも、息子の自分が矢面に立つべき。

小太り刑事は「未成年にそんなことはさせられない」と懸命にとめようとした。山紫郎が痩せ型で、合気道をやっているとは思えないほど頼りなげに見えるから、余計に心配したのかもしれない。それでも「僕らの無念や怒りを報道してもらうことが、犯人逮捕につながるはずです」と押し切つた。

マスコミの前に立つたのは、花恋の遺体発見から三日後。十二月十七日。

押し寄せるカメラとマイクの群れに疎すくみかけたが、毅然とした対応を貫けたとは思ふ。妹を失つてかなしいこと、女手一つで自分達を育ててくれた母が臥ふしていることを、繰り返して訴えることもできた。それが伝わったか、あの日以来、マスコミの取材はない。事件の残酷性と、山紫郎が未成年であることが配慮され、本名や顔写真が報じられることもなかつた。